

先輩インタビュー

「建築は本来、人間の総合文化」

尾崎英二 (S31)・稲葉和也 (S32)

平成 31 年 4 月 16 日 パイラスクラブにて



尾崎英二氏 略歴

昭和 31 年 東京都立戸山高等学校卒業
昭和 36 年 東京大学工学部建築学科卒業
昭和 36 年 4 月 倉敷レイヨン営繕部入社
昭和 37 年 7 月 浦辺建築事務所入社
昭和 49 年 4 月 尾崎英二建築事務所設立
現在 公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部
建築相談室 (平成 13 年～15 年 室長)、

住宅紛争処理委員 (弁護士会仲裁センター)、欠陥住宅関東ネット運営委員、一般社団法人
マンション大規模修理協議会 監事

著書 「欠陥住宅の見抜き方・直し方 77 のポイント」共著
都市・建築城北会を創立



稲葉和也氏 略歴

昭和 32 年 東京都立戸山高校卒業
早稲田大学理工学部建築学科卒業
早稲田大学大学院修士、博士課程修了
(建築史専攻)
昭和 43 年 早稲田大学講師、文化学院講師 (～昭和
52 年)、早稲田大学古代エジプト遺跡調
査 (～昭和 50)

昭和 50 年～東海大学建築学科講師、中国より古建築視察招聘

以後古代中国建築史研究のため、遺構や少数民族建築調査

昭和 54 年～東海大学助教授 建築学科に学芸員課程設立

平成 20 年 東海大学文学部文明学科定年退職

昭和 40 年頃より国内の古民家、社寺建築調査、研究、保存を行い、東京都、横浜市、世田

谷区などの文化財保護審議会委員を務め、民家園の建設、社寺建築の保存修理を行う。
現在 台東区、調布市、東久留米市、杉並区、東村山市、立川市など文化財保護審議会会長・委員、博物館運営委員などを務め、古民家、社寺、近代建築など文化財の調査、指定、保存に当たる。NPO 法人木造建築文化総合センター理事長、斎田茶文化振興財団理事
著書 「日本人のすまい」(彰国社)、「Japanese Dwelling」(講談社インターナショナル)、「建築大辞典」(彰国社)、「総覧日本の建築」(日本建築学会)、各地文化財報告書、「漢代建築の復元的研究」(論文)など。

都市・建築城北会に創立当初から参加

戸山 32 満州会を同期 10 名ほどで 4 年前から開催

(尾崎先生に先輩お二人が活動されている都市・建築城北会の始まりについてご紹介をお願いします)

【都市建築城北会の面白さ】

尾崎：都市建築城北会について申し上げます。私が最初城北会本部の理事になって、しばらくしてから航空城北会ができて、非常に盛大にやっていました。飛行機の木村秀政先生がおられまして、先生は四中の先輩で戦争中は東大の助教授でしたが、敗戦で東大では航空学科がつぶされて、日大に行って航空学をおやりになっていました。もう一方、高木養根(たかぎ やすもと、日航社長)さん、この二方が航空城北会の大将でした。事務局長は横森さんという昭和 12 年卒の方で、その方から「尾崎君も入れ」としつこく言われたのですが、私は飛行機に特に興味がない。それなら私の専門の建築の城北会を作らなくてはと思ったのですが、なかなか一人ではできない。一方、私は千葉城北会の事務局長をずっとやっていたので、千葉城北会の幹事会で私が「建築城北会を作りたい」と言ったら堀口さん(昭和 32 年卒)が「じゃ一緒にやろう」と言ってくださいました。それで、堀口さんと私が会うことになりました。そのときに堀口さんは、今日参加されている庄内強さん(昭和 32 年卒)と来られて、三人が発起人となりました。手紙で名簿から何人か声かけて 7～8 人集まりました。その中の昭和 29 年卒で一番先輩の椎名さんに会長になっていただきスタートしたわけです。ここで森川さん(昭和 51 年卒)が作成された資料を見て下さい。こんな形で第一回は芦原太郎さん(昭和 44 年卒)の講演会で始まりました。芦原太郎さんは建築デザインの面でも有名で、日本建築家協会の会長を長い間勤められた方でした。お父さんは芦原義信さんで、この方も建築家で芦原建築設計研究所を開いてやっていました。それで東大の建築は 30 年から 40 年前位から、設計の講座は民間の建築家に限る、と決めたのです。普通は助手、講師、助教授、…と順に上がっていきませんが、その講座だけは、いきなり民間の設計事務所の所長を教授にする。その第一号が芦原さんのお父さん、そういう形でした。そうすると、教授に成る年齢は 50 代とか高齢ですから、停年は昔 60 歳でしたので、あまり長い間はやっていない、長くても 10 年位、とうようなことで、建築事務所の所長が繰り返し教授になり、今も続いて、10 人位になりました。例会を母校の戸山高校でもやったこと

があります。新校舎やビオトープ（設計 多胡〔S35年〕さん）を見たりして。戸山高校の新校舎は校長先生に頼まれて、設計は学校側から指名して芦原さんになりました。東京都は普通指名された建築家のアイディアは尊重するのですが、芦原さんの場合は尊重されずにスッタモンダして結局は初めから都がまとめたプランを押しつけようとしたので、物別れになって、最後まで芦原さんは面倒みていません。そんな経緯がありました。母校の戸山高校で都市・建築城北会を開いた時は、たまたま台風のときで学校の行事はすべて中止。校長先生から私の家に前日の夜に電話がかかってきて「都市・建築城北会は中止しませんか？」と言われました。でも中止しようとしても連絡のしようがないわけで、「いや、都市・建築城北会はやります」と言って台風の中で敢行しました。集まりが夕方台風の影響が残っていたので、来られなかった人もいましたが、かなりの人数が集まりました。もちろん校長先生もお見えになりました。みんなで校舎を見て歩いたときに、なんと雨漏りを発見しました。それで結果的に竣工検査みたいなことになり、すぐ都に報告して修理してもらおうという漫画みたいな一幕もありました。こうして毎年苦労しながら続けてきています。丁度第8回目が稲葉先生の講演でした。我々の会の参加者には建築以外の分野の方が結構います。建築が趣味という方で、他の工学部とは違っていて建築は教養の一つなのですね。そういう関心のある方が参加する。さらに現役の学生も参加する。これは他の城北会にはないと思いますが、東工大、早稲田、ときには東北大の建築専攻の学生が参加しています。

【都市建築城北会のユニークな講演内容】

（それではこの都市・建築城北会で講演された稲葉先生よろしくおねがいします）

稲葉：都市・建築城北会第8回で講演しました「近代の世田谷・多摩川沿岸」からお話します。私は世田谷の文化財保護審議会委員を40年ばかりやってきました。文化財というのは調査して、指定して、修理して、保存して、利活用するということまでやります。世田谷の民家園は40年間そのようにやってきましたので、ご案内させていただきました。森川さん作成の資料には岩崎家霊廟とありますが、これは一般にあまり知られていません。J.コンドルが設計した三菱の三代にわたる廟がそこに作られていて、それを見ようということでした。次に私が講演した第13回には台東区の徳川家霊廟もご案内しました。東京都の文化財保護審議会委員もやって保存をしていた関係で知った向島百花園内に将軍お休み処がありまして、その座敷を借りて一杯飲もうという企画でした。だいたい飲み会が半分なので、文化財紹介といっても。台東区では私まだ文化財保護審議会会長をやっていて、将軍の霊廟など調査したりしていましたので、普通は一般公開しないのですが、寛永寺さんから特別に了解を得て見せてもらったのです。

【驚くべき敗戦後の廃墟の中で】

（それでは稲葉先生のユニークなご経歴のお話をお願いします）

稲葉：我々の世代はいわば瓦礫の世代です。戦争も体験しているけども、満州から引き揚げ

て帰って来たらびっくりすることに、あたり一面瓦礫だったのです。高田馬場から新宿を見ると一軒も家がありませんでした。三越と伊勢丹が見えただけであとはなにもないのです。満州から帰って東京に来る前は静岡に2～3年いて、それから高田馬場に引っ越してきたのです。何にもなくて瓦礫ばかりでしたが、そのかわり色々面白かったですね。当時午前と午後の二部授業で、午前が終わると午後やることがないので、10人位で連れ立って新大久保まで歩きました。そうするとあちこちの屋敷跡の瓦礫の中からチョロチョロ水が漏れている。その水が出ている鉄管とか銅管を取るわけですよ。「金へん景気」って朝鮮戦争が始まって銅なんか高く売れました。そういう屑金属類を集めて大塚まで売りに行き、売った金でおやつのコッペパンを買うのです。お店の人が中にジャムとか入れてくれるのですが、それが実にうまい。もっともおやつというより主食だったかも。家もなくて、友達の中には焼けたバスとか防空壕に住んでいた人もいました。防空壕の場合下に水がたまるので簀子(すのこ)を渡して、脇に別の部屋作ってベッドみたくしていました。それを一軒ずつ探検するのです。人間ってこうやって生活できるんだなあと思いました。戸山町にはバラックが沢山並んでいて、色々なスタイルがあるから面白かった。今思うと屑拾いとバラックが私の幼年時代でした。また、神田川で鯉を取りました。雨が降った後、鯉が井之頭の方から流れて来るんですよ。それを網を仕掛けてじっと待っているとダァーって入って来ました。それを一杯取って飽きたら、今度は新宿御苑が丁度オープンした頃だったので、そこに行こうということになりました。監視がうるさいから浮きはこんな木っ端に糸張って投げておくのです。すごく大きな鯉がかりました。いままで人が入っていなかったからでしょう。取って帰るのに新聞紙にくるんで抱え、学校に着いたらプールに放しました。そういえばあの鯉どうしたのかなあってこの間、仲間と話しました。子供心には得意になって取ったところまでは覚えている。ところが、夏になると我々プールをきれいに掃除するのですが、魚が一匹もいませんでした。後で実はその頃宿直で泊っていた代用教員などの若い先生が食べていたことが判明しました。当時よく「先生何食べてんの？」とか聞いたりしていたのですが、まさか鯉こく食べていたなんて思いもしませんでした。というわけで、我々は鯉を食べた覚えはありません。宿直の先生がごちそうしてくれるわけはなかったですから。

【建築との繋がり】

(稲葉先生のお話しの面白さは建築の背景にある文化の歴史的説明にありますね)

稲葉：それではそのあたりについてお話ししましょう。私は満州で生まれました。父親は建築家でしたが、昭和恐慌で学校出ても仕事がない。たまたま新京市という新しい首都が満州国に出来るというので渡ったようですが、父の兄は大倉土木組(現大成建設)で満州に行って所長をしていました。ちょうど私が生まれた昭和13年にダム現場で亡くなったんですけど、その兄を頼って満州に行ったようでしたが、土木の人は建築の人なんて相手にしなかったようで「おまえら役に立たん、来なくていい！」と。そもそも建築の担当分野がせまいのです。たとえば、原発の現場が津波に遭って上屋が問題になりましたが、あの原発の全体

工事量を 100 とすると 80 位が土木で、上屋みたいに見えるところが建築ですが、それは 20 位しかありません。大成もそうですけど、鹿島も清水建設もみんな満州での実績が戦後の日本の復興を支えたのです。満州では「あじあ号」など当時の超特急列車をつくったのですが、そのノウハウがあるから戦後すぐに鉄道も復旧して、新幹線にもつながっていったと思われます。やはり技術というのは続けていかないと、途絶えるとダメになります。そういう状況で私は満州の新京で生まれました。

【尾崎先生の敗戦前後の命がけの体験】

尾崎：我々世代というのは戦中を体験した、たぶん最後だと思いますね。昭和 35 年卒の後輩たちに聞くと「空が真っ赤に燃えていた」という印象を言っていました。ただその年代ではなかなか日常生活まで詳細な記憶はない。私自身で言えば、昭和 12 年支那事変のときに深川で生まれて、昭和 16 年のときに太平洋戦争が始まったわけです。そのときよく覚えていることは、近くに写真館があって、そこに太平洋戦争が始まったときに「軍神」といって 7 人か 8 人の写真が並ぶんですね。（これはハワイの真珠湾攻撃の際、特殊潜航艇を放ったのです。しかし、戦艦には一台も当たらず、みんな砂に突っ込んだりして乗り組んだ兵士は死んだ。ただし一人だけ生きのびた兵士がいて、これが捕虜第一号になった。）この写真が強く印象に残っています。昭和 19 年になると親が深川から用賀に引っ越しました。

理由はわかりませんが。それで用賀の小学校に入ったのですが、夏休みになると親は用賀も危ないと言って縁故疎開で両親とも新潟の高田出身なので父親の実家の高田に行って 1 年間居ました。高田は工場もない、とにかくなにもないところでしたので空襲はなかった。なかったけれども、直江津・長岡はやられた。夏休みになったら今度は高田もやられるというので山の寺に逃げたのです。無人の寺を見つけて、子供、それからばあさんと逃げた。逃げる途中で田んぼの畦道をばあさんがリアカーを引いて私らが押して行っていたら艦載機につかまったのです。日本は当時全国どこにも米空母が来て、その艦載機が人々を襲っていました。それが 1 機来ました。そこで田んぼに飛び込んで逃げたのですが、敵のパイロットは低空飛行して確かめたら婆さんと子供 2 人でしょ、それで撃たないで行ってしまった。撃たれたら一巻の終りだった。そういうふうに過ごして、戦後すぐ親が引き取りに来て、昔住んでいた深川の家あたりに連れていってもらいました。おどろいたことには、そこには全く何にもありませんでした。あるのは国技館の鉄骨の燃え残りと小学校がコンクリート造りだった跡の燃えかす、その 2 つ位があるだけ。住むべきところには家を建てようがないので、穴を掘って焼けトタンを屋根みたいにして架けて地中に住んでいました。こう見ると家が建っているのはほとんど見えない、そんな状態で戦後間もない時期（S20 年秋）に少人数の方々が過ごしていたのです。

【軍国主義の基礎としての国民学校】

稲葉：尾崎先生の直後に私は生まれたわけです。その頃国民学校というものがありました。

戦前最後の学年が昭和 20 年入学生で、私は入学してその年の 8 月終戦になった。国民学校は昭和 16 年太平洋戦争が始った年に出来て、昭和 22 年の春まで続きました。

尾崎：「〰国民学校 1 年生…♪」という歌がありまして、それとともに入学式の時に迎えられたのを覚えています。

稲葉：関東大震災の後、昭和初期に復興小学校というのが鉄筋コンクリートで建てられたのです。都心の小学校はみんな鉄筋にされたのですが、そこには教員室の中に奉安殿というのがあって、天皇陛下の御影と教育勅語が入っていました。それを開けて仰々しく運んで生徒の前で訓話するわけです。いまでもその遺構が学校に残っています。

尾崎：我々のところでは大抵校門から入ったすぐのところにありました。

稲葉：国民学校というのはまさに軍事国家になるとき国民皆兵にするための学校です。

教育勅語って全部言えないとダメでしたね。言えました？ あの頃から日本が軍事国家になったその前触れですね。

【命がけの満州逃避行】

稲葉：ところでもう一つ話があります。私は満州国の新京市で生まれました。今は長春と言います。そこは、いわば関東軍の首都で、それまでは奉天でした。それを満州国建国の昭和 7 年に新京に移したのです。これは満州国をつくるために関東軍が守るということで、新京市はまわりを軍人で守られた都市だったのです。中国人を追い払って。私はそこには日本人しかいないと思っていました。そしたら戦争に負けた後、中国人がワーッと入ってきて、なんか我々が悪いことやっていたんじゃないかと思いました。もっとも、父親は何も言わない、負けたとも。でも明らかに中国人の子供が「お前ら出てけ！俺んここはこの家だったんだ。」みたいな感じのことを言っていましたので、どうもこっちが悪いことしたんじゃないかなという気持ちはありました。父親は日本が侵略したとか一切言わない。だけどその時に、国府軍とパーロ（八路軍）と言って共産軍と、つまり蒋介石側と毛沢東側が市街戦でバンバカやり合うわけです。我々は夜、青酸カリ持たされて、彼らが入って来たら、みんなでこれを飲んで死ぬというのがずっと毎晩続いていました。もっと悪いのは我々「露助」と言っていたロシア兵がダーッと来たときです。彼らは監獄に入っていた連中だから、教養はないし粗野なのです。みんな時計を奪って腕に幾つも着けて、「女だせ！」って夜来るのです、カービン銃持って。だから母親なんか男装にして、顔を真黒に塗って、襲われたらみんな飲もうと言って青酸カリ毎晩渡されて、そういう生活を 1 年やりました。1 年半後に引き揚げて帰ってきました。持っているもの全部中国人に売って食いつないで帰ってきたのです。一方、日本内地の話聞いてみると、尾崎先生のところ（戦前に住んでいた深川一帯）は家もなにもかもみんな焼けて何にも無くなったんですね。そういう意味では満州の方では売るものが有れば食べられたので、ある意味では向こうの方がまだ良かったかもしれません。ただし、生きてればのことですが。しかし開拓団で行っていた人達はずいぶん寒いところで苦労したようです。ロシアが参戦した頃、私は丁度ハルピン近くにいました。8 月 9

日にロシア軍のミグ（戦闘機）が飛んできて無差別でやり始めたのに、関東軍の兵舎には1週間前に兵隊が逃げてしまって誰もいませんでした。私の同級生の女の子が兵舎に住んでいたのに行ってみたら誰もいないわけですよ。その後で1週間前に兵隊がいなくなったことがわかった。その後にミグ（戦闘機）がダーッと来たでしょ、これで逃げろというわけで、また新京まで逃げた。汽車で持つもの持って朝鮮に逃げようとして、8月15日に終戦になったので、汽車は動かなくなりました。それでまた新京に戻って食うや食わずの1年半の生活をしました。こうしてみると明らかに「やっぱり日本は、あじあ号に乗って大連まで遊びに行ったりして幸せな生活をしていたけれども、どうもなんか悪いことしていたのかなぁ」と子供心にもわかりましたよ。要するに主従が逆転してしまったのだから。ある日、ジープが来ました、国府軍の。「ここ（我々は煉瓦の住宅棟に住んでいた）を事務所に使うからどけ！」って連中が言う。父たち大人たちは小さくなってハアハアとかしこまっているだけ。私はそれを見ていて「あれっ？ワンさんじゃないの？」って声を出しました。相手のワンさんは驚いて「おお！」って。危ないところでした。実はその司令官は私が住んでいたハルピンの家で使っていたコックだったのです。私は子供だからかえってよく分かったのです。そのコックの正体は国府軍の軍人だったのです。それで終戦になってコックから司令官になって、私たちに「事務所明け渡せ！」なんてやってきたわけです。当時コックになったという渡り労働者をクーリー（苦力）って呼んでいたのです。彼らは麻袋だけ持ってアチコチに渡っていましたが、今から思うとみんな正体は抗日戦争の中国の兵隊だったのですね。私たち日本人は「匪賊」と言っていましたけれど。「匪賊」なんかじゃない、みんなれっきとした抗日戦争の兵士だったのです。それはもちろん内部的には共産党や蒋介石派なんかに分かれていましたけれど。だから日本が負けたと同時に一気に開戦になったわけで、これは明らかに日本人が侵略していたということが子供心に分かりました。

もう一つ話しますとね、父親の世代はそうやって日本が食えないから満州に渡って満州国の首都を作ったのですが、たまたま私は昭和13年生まれですが、愛新覚羅溥儀に溥傑という弟がいて、溥傑は日本に来て嵯峨侯爵家の浩（ひろ）さんと一緒になって、生まれた娘慧生が東大生と天城で心中したのですね。心中した彼女と私は同い年で同じ病院で生まれましたが、その病院は建築家の父親が設計した病院でした。それは彼女が死んだとき知りました。父親から「お前この病院で生まれたんだよ」って言われました。

ここで母親の話をちょっとさせてもらいます。母親は薩摩、今の鹿児島県出身です。西郷さんの方について曾祖父は西南戦争で死にました。曾祖父は祖父が2歳のときに死に、曾祖父の兄弟はみんなどっかに分かれたのです。曾祖父は維新政府に逆らったでしょ、だから祖父はまともな仕事に就けなかったのです。同じ薩摩でも西郷従道は西郷さんの弟でも偉くなりました。それで祖父は日露戦争の後明治時代に大連に渡って、母親も大連で生まれたのです。大連ではロシアを追っ払った後にすぐ日本が入ったのです。99年の租借権を中国から得たので。ということで私が生まれた後に大連にはよく「あじあ号」に乗って行けたのですけど。その祖父は何をやっていたかという現地で領事館に勤めていました。ち

ようど吉田茂が明治42年頃に領事館に赴任し、満州に渡って来たのです。吉田茂は祖父と同じ年齢だったようで、よく祖父の家に来ていたのです。彼もやっぱり戦争反対でね。あちはエリートだからイギリス大使になったのですけど、内のじいさんは領事館に定年までいました。しかし吉田茂はイギリス大使になったけど戦争反対だったのでクビになってしまいました。日本にも帰れないためか、大連に戻り、祖父の家でしょっちゅうご飯をご馳走していたという話を叔母から初めて聞きました。吉田茂の息子の英文学者の吉田健一もよく家に来て飯を食べていたとか面倒見たそうです。どうも祖父が吉田さんと話が合うということは日本も戦争反対の人が多かったということですよ。関東軍が出来る前までは、日本はなんせ99%年租借権持っているのだから、別に支配しなくたって居られたのです、イギリスの上海と同じように。イギリスなんて上海をずーっと握っていたわけだから。だからそういうふうにしていけば良いのに欲が出てきてシベリヤ鉄道開発したり、ダム開発したりしてもう全体がほしいとなってしまった。そこで止まっていればリットン調査団も認めたものを、満州だけでなく、日華事変を起こして、漢民族の中国まで侵略しようとしたからおかしくなった。だから吉田茂もその辺で止めときゃいいという考えだったみたい。そうすれば我々は今でも満州に住んでいたかもしれない。まあ確かに侵略ではあったけど。ただし満族にとってはね日本人が行って初めて荒野を開発したのです。もともと不毛の地なので。満州にはそもそも農民がいなかったのですから、満族は騎馬民族です。満州八旗と言ってね、八つのグループの騎馬民族が住んでいたわけです。だから日本人に感謝していましたよ。父親がよく言っていましたけど、満族に「日本人ね、貧乏になって食えなくなったら、また戻って来いよ」って帰るときに言われたってね。「やっぱり中国人（実は満族）は心が広いなあ」って言っていました。だから満族は漢族とは違うのです。今の政府は満州から見ての南方の漢族です。満州の南に清朝を作っていたのは満族です。「ラストエンペラー」は満族だったのです。今の中国政府とは違います。今は中国全土を漢族が支配しているけど、中国はそもそも多民族国家で民族としては56族もいます。だからそういう民族間の協調の歴史を生かすような政治の方向にしないと。今は漢族の他民族への強引な政治でやっていますが、あれでは絶対に矛盾が起こってくると思います。

【建築に目覚めるきっかけとなったスペインのコンペ】

稲葉：私は昭和38年に大学を卒業したのですが、東京オリンピックを控えて途端に就職事情が良くなりました。つまりそれまでは建築出たって食えなかったのです。学校には先輩たちが就職できずにゴロゴロしていました。みんな就職無いのですから。そしたらオリンピック決まったら途端に、就職ブーム。ゼネコン始め、どこもかしこも、みんなすごいのです。同級生なんか竹中15人、大成に15人って、すごい数で就職ができたんです。当時、設計事務所に大手が無かったのでみんなゼネコンに行ってしまった。やはりゼネコンがある意味建設業の骨格を作ったんですよね。

丁度そういう時期にじゃあ「何やろうかな」と思って、大学の3年のときにスペインのコ

ンペをやったのです。スペインにカナリア諸島というところがあって、その島の開発をする計画でした。学校を1年サボって成城に一軒家を借り、そこに15人位集まりました。学校にはそこから誰かが代返に行きました。そこで設計をまとめて出したのですが、大変でした。そもそもコンペの説明書はスペイン語で、初歩からまるまる勉強しなければならないし、大量の資料を読み込まなくてはならないし、どういう思想でやらなくちゃならないか、などなどずいぶん勉強しました。先生に聞きに行ったら、先生自身と我々はライバルの関係とわかりました。先生の事務所も出していたのです。だから教えてくれません。先生だって勉強中でした。あのときは丹下さんもやっていたし、早稲田でも出していたし、建築家が数人出していました。我々は最後までやったけど、コンペに参加した半分は脱落しました。なにせ山ほどの書類を読まなくてはならないのです。その困難を乗り越えてなぜ我々がやれたかという、コンペで1等賞になるとカナリア諸島の島の土地がもらえるのです！みんなでそれをもらって、外国に行こうというのが夢だったのです。あの頃日本は敗戦後で、お金がないから外国なんてそうそう行けません。ドルがうんと高いから（対ドル為替相場1ドル360円）。交通機関についても、ときたま留学などで外国に行く人を見送りに横浜港に行くと、ドラがジャジャジャーと鳴り、「俺も一度は行くぞ！」なんて思ったけどなかなか行く機会がないわけですよ。外国出張のお金に関しては商社なんか優遇されていたようですが、彼らでも思うように使えたかという、渡航費は会社がすべて出すけど海外での滞在費は借金だったようです。そんなわけで大学に入っても半分は外国に行きたいという気持ちが強く、丸善に行ったら海外の地図を買ってきて、ここへ行ったらどこに上陸して、ああしようこしようとか色々思い描いていました。それがきっかけでこのコンペをやって、初めてある意味、建築の世界が見えた感じがしました。都市計画から建築まで全部やったわけですから、当時珍しいモノレールなんかそのときすでにコンペの設計で採用したりしました。

【近衛文麿の息子の嘆き】

稲葉：ところで、つい1週間位前に、川越の奥に川島町というところがあるのですが、そこに日興証券をつくった創業者（遠山元一 とおやま げんいち）の自宅（現在価値で150億円かけた3000坪の豪邸）があるのです。それは昭和初期に作られているのですが、それを見てびっくりしました。4尺5尺くらいのガラス戸が一枚ガラスなのです。まわりを全部磨いた磨きガラスでしかも厚みは6mmあります（現在でも一般住宅の窓硝子は3mm厚が多い）。よく戦前に、と思いました。あれはフロートガラスです。アメリカから輸入したと言っていましたから。そんな技術がもうあったのですね。だからヨーロッパとかアメリカのシカゴの高層ビルは全部鉄骨で、全部ガラス張りです。耐圧ガラスでないと風圧にもつわけがありません。当時日本はまだ吹きガラスで凸凹したガラスしか使ってないのです。それを見て「アッ」と思いました。あるところにはあったのだなと、知らないだけで。

近衛文麿大臣は昭和初期に荻窪に屋敷を買ってそこにずっと住んでいたのです。荻外荘（てきがいそう）という。それを最近、杉並区が文化財保存のため購入したのです。私も杉

並区の文化財保護審議会委員をやっていて、その保存活動に関わっていますが、今改修中です。その中で近衛さんの資料をずっと整理していて、近衛さんの息子さんの資料が出てきたのです。その息子さんは戦争で亡くなりました。その息子さんは昭和16年に戦争が始まった時にアメリカの大学から帰ってきて、アメリカの技術の凄さを知っていたので「おやじ、こんな戦争、ほんとおっぱじめんのか？勝ち目がないよ」ということを書いています。だけど近衛さんは、息子さんが帰って来ていい情報持って来たけど、もう止められない。あの時には近衛さんは各方面裏で一生懸命運動するのですが、結局はダメだった。軍部がどんどん開戦の方向に行ってしまうので。

【軍国主義の末路】

稲葉：要するに、軍事国家というものは上司の言葉に逆らってはならないのです。そういう国家を作ったらもう誰も逆らえなくなるのです。それを乱したら軍隊の組織が成り立たない。今の中国だってそうです。軍隊ってどこでもそうです。下士官がもし謀反したら司令官は後ろから撃たれてしまう。そもそも中国人は組織を信用してないですよ。何を信用するかと言えば、ラオ・ポン・ユー（老朋友）。それって、「お前と俺はラオ・ポン・ユー」、つまり「古き友達」これが唯一の財産です。国家が転覆しようが何しようが、ラオ・ポン・ユーは固く結ばれているというのが、時代を越えて成り立っていた思想だったのです。今では簡単にラオ・ポン・ユーと言いますが、本当はもっと絆が深いのがラオ・ポン・ユーなのです。人間と人間の関係で大切なのは政治体制じゃないのです。だいたいなんでも組織は軍隊的になってきますね。中国では歴史的王朝にそれぞれ名前の下に〇〇朝、△△朝って付いていますが、みんな皇帝が支配している証拠です。

共産主義は日本でも人類にとって薔薇色の世界と思われた時代がありました。でも結局は失敗したってことはロシアが証明したわけです。どんな国でも理想の社会をめざして作るのですが、やっぱり独裁者が出て来ちゃうと終わりですよ。

【合掌造りは世界最先端のピン構造！】

（スペインのコンペ参加から後、漢代の建築史研究に入られたきっかけは？）

稲葉：私が建築の歴史を志した頃はものすごい建築ブームだったのです。給料もいいし、早く学校出て給料をもらった方がいいかなとは思いました。たださっき言ったようにコンペをやってスペインのこともわかったし、外国も見えてきて、なんかこのまま設計やるのいいのか、ちょっと待てよ、根本的に考え直してみたいなと思いました。そこで、見回すと一番不人気な研究室が歴史の部屋でした。そこには学生は行かない。設備や構造・設計はみんな行くのですが。また大学院にも行かない。大学院に行くより就職した方が給料がいいから。みんな大学出て行ってしまって誰も残らない。ただ、それでは大学院どこに行こうか、と思ったときに、歴史の部屋は誰も行かないからかえって勉強がちゃんとできるのではないか、誘惑もないだろうということで入ったのです。たまたま大学4年生の頃、建築学生会議とい

うのがありまして、全国の学生を集めて会議をやっていたのです。東大も入っていました。そうして各大学集まってさらに勧誘に行くわけ。鹿児島やら北海道まで。それで学生が集まり全国大会を白川村で行い、みんなで数日間合宿して色々と討論しました。そこで「せっかく目の前に合掌造りがあるんだから実測しようよ」と言ったら、20名位がやろうと呼応してくれて、合掌造りの図面を作りました。合掌造りというのはその名の通り、屋根が手を合わせるような形になっているのです。この下は梁（はり）です。その上に合掌が乗っかって小屋裏を作っているのです。根元は梁（はり）の上に刺さっているだけで止めていません。だからこの根元は自由に動きます。茅の重みで普段は安定しているのですが、風が吹くと倒れます。でもまた戻る。これを「ピン構造」って言うのです。大学の授業で「ピン構造」は習ったけれどよくわかりませんでした。これを見たらまさしく「ピン」の形なのです。あ、そうかと合点がいきました。構造学でピン構造って言うけどなにかよくわからない構造で、なにか非常に不安定な構造じゃないかって思っていました。ところが、この不安定な構造がこういうふうに固まると、安定するのですね、全体が一つになって。つまりモノコックになる。つまり合掌を母屋が繋ぎ、その上に垂木やエツリ、そして茅が葺かれて、全体が籠みたいになるわけです。籠はグッと力を与えると、戻る力が出るのです。それが復元力で、これが大事だなんて気が付いたのです。普通、応力を与えると変形したままなのが近代建築なのです。戻らない。だけど木造建築は戻るのです。ここに木造建築の意味があるなということ構造の先生に言ってもなかなか分かってくれない。「そおお？」なんてね。

私が丁度大学4年生のときに、鹿島建設が霞が関ビルで初めて挑戦するのです。それを構造の武藤さん（武藤清〔むとう きよし〕、鹿島建設元副社長）がやったわけですが、今までの建築の構造というものは剛構造といってガッチリした構造にしていた。そうするとあんな高い建物を作ると1階の柱が5m位の太さになって、部屋が全部柱になってしまうわけで、その剛構造の理論を変えない限り建たないわけです。そこで柔構造という理論が出てきたわけ。それは要するに何かと言うと積み木細工なのです。五重塔と同じで、積み木でセパレートしています。通し柱でもつというけれどそうじゃない。通し柱は剛構造の考え方です。柔構造の考え方は管（くだ）で全部切れている。五重塔の中に芯柱が入っています。でも実はあれはぶら下がっているだけです。あれで支えているわけではないのです。あれがブラブラ揺れるわけでしょう。重心が移動して倒れずにもたせているのが五重塔の秘密だったわけです。この考え方はヨーロッパにはありません。地震があちらにはないから。だから日本は地震が多いので、日本に合ったシステムを考えようという柔構造派が出てきました。柔構造か剛構造かをめぐって構造学者が学校の中でも真っ二つですよ。剛構造の先生と柔構造の先生と意見が分かれているから学生にとっては話聞くのが面白かった。そこで真っ二つに割れていました。剛で行くか柔で行くか。経済的なことを考えれば、柱ばかりになったら、収入の元となる部屋のレンタル代は貸す面積がないと入ってこない、そのためには柱をなるべく小さくしてレンタル比を増やす、というのが建築の考えですけど、それには柔構造でないとダメなのです。ちょうどその理論とさっき言った合掌造りとが合致するので

す。これは待てよ、日本建築には良さがあるから、木造建築をちょっと研究する必要があるなと思いました。大学院で構造の先生に木造建築の木材接合方法などを研究したいと言ったら、「今はそういう時代は終わりましたから」と言われ、当時は何を言っているのかなあ、って思いましたね。実は昭和 38～39 年に、建築学会では構造の先生がこれからは RC と鉄骨の時代だから木造建築は一切研究しないということを学会誌に発表していたのです。私はそれを知らなかった、後になって知りました。それであるときの構造の先生の言葉を思い出して「あ、そうだったのか」と納得しました。それで結局、学者が手を引いたので、その間に工場のメカで作る住宅産業がどんどん進出してくるのです。それは大学が応援したのではなくて、工場の大量生産の方の分野から勢いつけてきて、今やゼネコンの総額より住宅産業の方が上になりました。我々の頃には住宅産業に行きたいなんて言うと、「行くな！ あんなどこ。」って言って行かせなかったくらいでした。その間に工業化がずんずん進んだわけです。今やそれが主流となっているのですから。

【ひよんなことからエジプトの発掘調査へ】

稲葉：それで歴史を選んで、木造の重要性がわかってきたのですが、やがて色々研究をしていくと、中国の建築をやらなくてはいかんとなりました。それは、丁度平城宮の保存運動が始まって、私も平城宮の発掘調査に行きなどしましたが、国が中心になって土地を買い上げて発掘調査を始めたのです。そうしたらそこから奈良時代の紫宸殿の跡が出てきました。それでこれから少し中国・朝鮮の建築技術を勉強しなくてはならないなということで始めていたのです。その頃実は中国のことをやろうとしていたら中国で文化革命が起ってしまった。いよいよ来年中国へ行こうとしていたところでしたが、行けなくなりました。しばらく行けないだろう、研究もできない。それで向こうでは学者が虐待されて、学校にいる人間は追い出されて学校には人間がいなくなっ、行ったところで意味は無いよということになってしまいました。どうしようかなあ、と思っていたときに、たまたま学生紛争があって、外国の調査はもともと東大と京大しか行っていなかったのですが、紛争で両大学とも行けない。そこに早稲田が申請していて、それがたまたまエジプトの調査を申請していたのですね。目的はエジプト王朝というより「エジプト文明がなんで起こったか、文明の原点を探ろう」というテーマだったものですから、私はこれは行きたいと思いました。で結局エジプトの発掘に 5 年付き合ったのです。当初文部省から科研費が 500 万円しか出なかった。500 万じゃ発掘調査の人夫代ですっとなでしまっ、私達の生活費も出ない。そこでゼネコンにお願いすることにしました。その頃竹中工務店が業界団体の会長だったので、社長のところに行って「実はお金がたりないのです」と言ったら、「あ、そう。で、いくら」とあっさり言われました。「各社 100 万ずつください」と言ったら「ああ、いいよ」と大手 5 社に呼び掛けて 500 万パツと集まってしまいました。商社は三菱商事とか住友も回りました。でも「商売にならない」とか言って、1 文もくれないのです。

最後のエジプト王朝はプトレマイオス王朝でして、クレオパトラの頃にエジプトが崩壊

するんですね。紀元前 3300 年頃から丁度紀元前後ローマが力を持った頃、それまでエジプトは続いていたわけです。それでローマの属国になってしまうわけですが。それで凄いなど思うのはローマ帝国はアフリカの北部やイギリス、ドイツ・フランスも含めて全部で帝国を作ったわけですよ。それで属国にもローマの市民権を与えるのです。支配というより市民権を与えて独立させるわけですよ。そこで作られた建築はローマでもエジプトでも違わない、同じ手法で作っています。今でいえばインターナショナル建築ですね。しかもコンクリート造の。ローマに行っても同じですし、エジプトのカイロで掘っても同じ技法が出て来る。ローマ時代どこの国でも神殿やフォルム、バシリカ、劇場、競技場、浴場など全て同じ技法で造られていたのです。

【揚子江以南の越族の米文化が日本の米文化！】

稲葉：ところで、エジプトに行った私が、なんで中国の建築史をやろうとしたかという、しかも漢民族の研究をしようとしたかという、漢王朝というのは、紀元前後、紀元前 200 年から紀元後 200 年の 400 年間でして、この時代はローマ時代と重なるだけでなく、なんと日本の弥生時代とも重なるのです。まさしく、ぴったり。その時に日本に米文化が入って来る。同時に高床式建築が初めて弥生時代に現われる。ここまでは当時わかっていました。けれど丁度私が中国の建築史の研究を志そうとしたときに、上海の下流の揚子江流域から米文化の遺跡が発見されました。そこには紀元前 5000 年頃に稲作文化があったということが分かったのです。それまでは黄河流域にしか中国の文化は無い、しかも漢民族は、黄河流域の西安の付近に住んでいました。ところが黄河流域には、今でこそ山林も少ないですけど、かつては森林がいっぱいあったのです。すべて伐採してしまっ、緑が無くなってしまった。たぶん万里の長城で煉瓦を大量に使用したからでしょうが、みんな木材に使ってしまい、焼き物の焼き付けにいっぱい使うでしょ。だからどんどん無くなったのですね。

ところが揚子江流域の同時代に米の文化があったということが、分かったわけです。それまでは日本米はインド米が雲南省を通過して、朝鮮経由で、日本に来たというのが主流の考えだったわけです。ところがそうじゃないことが分かった。揚子江の下流で、紹興酒が造られる紹興に米の原産地である河姆渡（かぼと）遺跡が発見されたのです。中国で米の発酵酒を作っているのは紹興だけなのです。他の中国酒、白酒はみんな蒸留酒です。同時に出てきた建築遺跡は高床式で日本と同じです。このことはずっと後に私がエジプトから帰ってから分かったことです。それまでは日本米というのはインドから来たと言われていましたが、その説が覆るわけです。そうすると中国史は黄河を中心に研究してきたけど、考え直さなくてはいけなくなりました。私はなぜ漢民族が南下したのかと思っていましたが、やはり他の穀物より米の方が豊かだからです。北方は麦の文化、饅頭（マントウ）や餃子の文化。南は米の文化、南の方がはるかに豊かです。三毛作だし。そうするとやっぱり漢民族は食うものは少ないし、秦の時代に統一して漢王朝を広げた理由というのは、やはりそこですね。

中国には民族は 56 族いますが、そのうち北方の民族というのは、蒙古族とか漢民族とか

匈奴とか少ないです。10 族位でしょう。ところが揚子江から南は 40 族以上もいます。タイ族とかシュイ族とかナシ族とか。中国ではそういった南蛮の少数民族を百越（ひゃくえつ）と呼んでいます。越族、ベトナムだって越です、南越。だから越というのは要するに揚子江流域から南にいた少数民族だということです。彼らはみんな米を作っています。一方北方は漢民族も含めて高粱とか麦しか作らない。米は絶対作らない。今でもそうです、作れない。これについて、朝鮮族の留学生に聞いたら、「漢族は作りません」って言っていました。それで本当に「あ、そうだったのか」と思いました。でも感化されて今は漢民族の中国でも南では米を作っています。だけど彼らはそもそも百越の一つであって、もとはといえばタイ族とかなんとかの少数民族なのです。どんどん漢が北から圧迫してきたので、タイとかビルマに逃げて今の東南アジアの少数民族になったのです。彼らは 40 族もいます。もともとは揚子江の南までいたのです。その一つのグループが日本に来たわけです。着いたところがなんと越後。あれはポートピープルが来たという感じですね。彼らによって日本に米が伝わって来た。まさに漢族が圧迫したので逃げてきた越そのものです。数年前新潟に石斧が出土して、そこに「越」という字が書いてあった。中国の学者に頼んで読んでもらったなら、これは「越」と判明したとのこと。越の文化は鮭とかなんかにしても東南アジア系の発酵文化です。富山の熟れ鮭なんてそうです。結局、揚子江流域の文化が入っていたようですね。

日本で海人族（あまぞく）って言いますが、まさに越族なのです。安曇野（あずみの）は海人族（あまぞく）って言われています、山の中ですけど。でも彼らの神様は船なのです。福岡に志賀島（しかのしま）ってあります。金印が発見されたところです。あそこの海人族（あまぞく）が日本海を北上してきて、糸魚川に入ったと言われているのです。糸魚川にしか勾玉が出てこない。翡翠（ひすい）の勾玉です。他は中国産しかないです。そんなことを知っているのは北九州の朝鮮に近いとこの部族です。

【弥生時代の製鉄の問題からその源流を求めて中国の遺跡研究へ】

稲葉：もうひとつ重要なことは鉄の問題。出雲は鉄で栄えていました。大和朝廷に一番対抗していたのは出雲です。出雲中心に鉄器が発達しました。ではなぜ出雲が鉄で栄えたか。日本は当時砂鉄しかとれない。当時砂鉄からだけでは製鉄出来ない。粘り気を出すためには原鉄が必要です。その原鉄は朝鮮の新羅と百済の間に伽耶国があり、そこでしか原鉄がとれない。そこに任那という倭の出張所を作り、そこから日本の出雲に輸入していたわけです。つまりその原鉄と砂鉄とを混ぜて製鉄ができるようになったのです。これは弥生時代からです。弥生時代から鉄が輸入されている。だから大和の五王も 5 世紀頃に朝鮮に渡って行くわけですが、あそこの鉄がほしいわけです。国を治めるために。そんなことで朝鮮のことや米のことからなんかやっていると弥生文化を解明しないといけないということになりました。それで中国に行きました。東海大学に勤めてから 1 年間研修させてくれたので、中国を旅して漢の遺跡を廻りました。調べていくとどうしてもシルクロードにつながらないのです。どこにつながるかというと四川省から雲南省に向い、ビルマの方につながるのです。第

二次大戦のときに、援蔣ルートと呼ばれた有名な軍事輸送路があって日本軍が北から攻めても蒋介石がこれをうまく使ってなかなか降参しないので苦慮しました。この西南ルートは昔からあったのだということが分かりました。ただ、仏教が盛んになるとシルクロードの方が近いのでそちらがよく使われました。万里の長城はシルクロードに重なりますが、あれはまさに当時のハイウェイなのです。ハイウェイ兼用防御壁ですね。特に風がゴビ砂漠はすごいのです。冬なんかに行くと石が飛んできて。高さ3m位の長城を作れば馬に乗っても十分風除けになるでしょう。そうすると商人が荷物を運搬できる。北方の蛮族から中国を守るための城壁というより風除けと考えた方が現地で見えた状況に合っています。漢の時代では城壁としては高さ3m位しかないの馬ならいくらでも越えられるのです。ただし、だんだん防御壁らしく厚くもなって明代になると構築素材も煉瓦になります。ですが煉瓦を焼くため木が無くなってしまいました。煉瓦としては大きなものです。10kgもあります。万里の長城が無い頃、黄河流域の下流では色々な国が争っていました。漢族といっても一つではなく、色々種族に分かれてそれぞれ国を作り、その周囲に城壁を作っていました。そのなかで北方の国の城壁を繋いで万里の長城になっていったわけです。秦の時代から統一して北方からの侵略に対して城壁を修復増設して守っていった。でも結局、ペルシャ人かと言われる楊貴妃だってそうですけど、いくら城壁作っても外国人はどんどん来るわけで、外来文化が入って来る。その文化はシルクロード沿いに来て、ローマと繋がっている。お茶もそうだし、絹も送れたわけです。今、後輩がトルコの発掘調査をやっている、そこでわかったことです。シルクロードはイスタンブールまでずっと繋がっています。後輩はヒッタイト文化を追いかけている大村君というのですが、早稲田大学のエジプト発掘隊に修行に来ていたので、私は彼に測量を教えたようで、「稲葉さんに三角スケールでよく頭たたかれた」と言うのですが、彼は今調査の所長です。彼が偉いのは日本隊だけではなくて色々な外国隊の調査団を入れて多角的に総合的に解明していることです。通説ではヒッタイトが鉄を発見したということになっているのですが、どうもそうではなくて別のところから持ち込まれてヒッタイトで発展させたいらしい。これが最近わかってきて、この半月位前に学習院で発表会があって、朝日新聞にもデカデカと出ました。なんで鉄の問題を大きく取り上げているのかと言うと、ラムセス二世の頃にエジプトとヒッタイトが争い、記録ではラムセス二世が勝ったことになっています。だけどヒッタイトの馬車は鉄製の車軸を使っており、エジプトの青銅製より強く、頑丈なわけです。それで争いは実はヒッタイトの方が勝ったらしい。でも記録では、エジプトは「わが方が勝った」と書いています。今は遺跡調査に基づいてヒッタイトの方が勝ったってことになっているようです。争いの場所はちょうどシリアというかあの辺で、エジプトはメソポタミアまで版図を持っていましたからね。

古代といえども、やはり文化というのは人間なら少しでも進んでいるものを取り入れたくなるというのは欲望としてどこの国でも持っていますね。だからあんな勾玉の石だって中国製でなくても、糸魚川にあるのなら糸魚川で造ろうとなるわけです。玉といっても特に中国で珍重されている白玉、あれもシルクロードの奥の方の天山南路の方から出ているの

です。白玉だと1個すごいのをみつけるともうひと財産になります。朝鮮人参と同じです。朝鮮人参も1本で家が建つくらいです。

【反日の強い中国・朝鮮で調査が出来たのは？】

尾崎：中国の古い遺跡の調査で色々ご覧になったというお話ですが、我々の同期で東大の文化人類学をやった大貫さんという学者がいます。彼の東大での最終講義後に私が質問したときの話でしたが、戦前は東大の建築史の研究では調査というのは必ず韓国と中国だった。これが戦争に負けて両国とも掘らせてくれなくなった。それでどうしたか、といたら東大は地球の裏側の南米ペルーまで行って掘り出した。一方早稲田はエジプトで掘り出した。こういう話聞いたのです。韓国・中国は戦前日本が彼らを植民地にしたので日本人には掘らせない、と聞いたわけですが、稲葉さんがお話しされたように彼らが古いところを見ていいということになったのは、どういう流れでそうなったのでしょうか。

稲葉：東大の教授は、戦前、朝鮮や中国に行くときは軍隊に守られて行ったのです。それで現地の人を追い出して強権で発掘調査をやったものですから、地元の学者からすごい反感を買ったわけです。これは私自身廻ってみてわかりました。民間で行けば別でしてでしょうが。だけどそうではないから、やはり相手は自分たちの領域を侵されたという気持ち、プライドが強かった。だから東大の先生でいいこと言われている人は一人もいませんでした。ああそうだったのかと思いました。研究成果としては東大の先生の成果は立派な本になってはいます。戦後も外国の調査団は入れないで、自立更生の精神が貫かれています。

【騎馬民族説の江上先生の言ったこと】

稲葉：ただ騎馬民族説を立てた東大の江上先生（江上波夫 えがみ なみお）はちょっと別で、江上先生と北朝鮮に呼ばれて一緒に行ったことがあって、そのとき「なんで江上先生、騎馬民族説なんてお立てになったのですか？」、って聞いたことがありました。江上先生は天皇陛下に5回も講義やっていましたが、天皇陛下から「あ、そうすると天皇家は朝鮮系の血が入っているのですね」って、すごく関心持たれたそうです。それで私が北朝鮮に行って向こうの文部大臣から聞かれて、私からも「先生なぜあのような研究されたのですか？」って聞いたら、「僕は蒙古の研究をしていた」と言われました。戦前に、蒙古の奥に入っていたそうです。そうしたら、蒙古は高句麗などとすごく繋がりが深いということがわかったそうです。高句麗人と結婚するのが彼らの一つのステータスだったようです。同じ騎馬民族だからなにか引き合うのでしょうね。そうやって調べていくと、高句麗というのは確かに原点としては満州の北、新京の辺にいたのです。それが紀元前後位に南下してきて北朝鮮の鴨緑江の北側に王都輯安を作るのですね。それが紀元後5世紀になって平壤に都を移す。それで仏教が栄えるのです。だからかなり中国の北辺と高句麗とが争っている時期があります。ある時期は北京まで高句麗が支配している時期があって、北朝鮮の教科書を見ると「北京までわが領土」って書いてあります。「あ、そうか」って蒙古と朝鮮の関係を納得しまし

た。江上先生は北朝鮮の装飾古墳を研究していました。北朝鮮は、朝鮮戦争のときに米軍が徹底的に爆弾落として、艦砲射撃をやったので地上にはほとんどなにも残っていません。あるのはお墓だけ。お墓の中に色々建築やなんか描いてあるし、私はそれを見たいから、一緒に同行させてもらったのですけどね。要するに北方の騎馬民族は、互いに繋がりが深いのですね。そうしたら、なんと北朝鮮の文部大臣は「うちは騎馬民族でなく農耕民族です。」って言うのです。今は馬なんて飼ってないから、そう言うのはわかりますけど。確かに漢族というのは農耕民族。一方北朝鮮というのは、すなわち高句麗は騎馬民族です。それが互いに和戦交流して生きてきたのですね。それが中国と朝鮮になっていくのです。

一方日本の住居は 1 万年続いた縄文文化の竪穴住居と米の文化とともに入ってきた 400 年間の弥生文化の高床式との合体なのです。中国と日本の関係で言うと、高床式のルーツは中国の越族で、中国の漢民族は違います。南の百越という少数民族の住居が文化とともに日本に来て、漢族はその百越の支配者という形です。『魏志倭人伝』なんかに出ている日本の文化は完全に中国の南の文化のことです。ところでその揚子江流域の文明ですが、木の文化だから地上には残ってないわけです。北方のように。北方はみんな石で作ったり、煉瓦で作ったりしていますから残ったのです。でも、南は木の文化で日本の神社建築と同じで建て替えない限り地上には残らないわけです。ところが、最近遺跡発掘調査がどんどん進み、今、四川盆地やなんかから出てくる米の文化の遺跡が 1 万年前まで遡ってしまいました。ということは小麦文化よりも早く揚子江の米文化の方が発達していたということです。そこで、今までの学説が覆ってしまいました。だからユーラシア大陸北方はずっと小麦文化。小麦文化はみんな争いをやっているのです。ところが揚子江以南の米の文化は、水を共有していますので、仲良くしないと米作れない。だから東南アジアはみんな仲良くやっている。つまりは水です。日本も同じです。ところがユーラシア大陸北方は水を共有しないので、略奪ということになります。私は漢の時代の建築史を研究していましたら、結局日本の文化に繋がる色々なことが見えてきたのですけれども、一番日本に文化的に影響があったのは仏教です。その仏教も従来はずっとシルクロード経由とばかり言われていたのですが、どうも西南ルート経由らしいとわかってきました。西南ルートとは中国の四川省から雲南省を經由してビルマへ繋がるというもので、古くからあった。それに沿って文化が早くから入ってきて、それがずっと下って朝鮮なんかを経て日本に入ってくる。そういった仏教文化のルートがどうもあったらしいのです。東大の我々の先輩にあたる伊東忠太という建築史学を確立した先生がおられるのですが、その先生が「法隆寺建築論」を明治 26 年大学院を卒業した時に書いています。要するに法隆寺の建築の源流、つまりエンタシスという柱に胴張をもった建築というのはギリシャ建築にあると。それが中東経由で中国に伝わって日本に来たという仮説を立てて先生自身もお調べに行ったのですが、結局成果は得られなかった。それはまだ実証されていません。結局私も先生の後を追っかけたわけではないですが、先生と同じルートを調べていたことになります。そうすると出てこないのです。エンタシス持った柱、それから、柱の「内転（うちころび）」。これは、パルテノンの柱なんかそうですが、垂直では

なくて内側に倒れ込んでいる。法隆寺もそうです。あれを「内転（うちころび）」というのです。垂直に立てると外へ倒れて見える。これを水平にすると下がって見える。だから初めからこういうふうに潜らせておくと水平に見える。錯覚ですね。そういう技術がパルテノンなんかに見られるわけで、伊東忠太はそれが中国に伝わって日本に伝来した、と言っているのですが、それを本当に実証できるかという結局出来ませんでした。私も先生を乗り越えたいなどは思って論文をまとめようとしたのですが、ついにまとまらずに終わりました。いずれ後輩が極めてくれれば自分の代にやらなくてもいいのではないか、という気持ちに最近はややくなりましたが、自分としてはなんとかそれを達成したかったですね。

でも、人間は高いものを望むという欲望というものが必ずあったわけで、それはギリシャ・ローマまで繋がるルートになっていったと思います。ただ中国人は認めないのです。1年間中国に居た時に中国の学者とずいぶん議論したのですが、例えば鉄の文化をとってみても、時代的に考えると中東以西の方は紀元前1500年位に興り、中国はいくら早く見ても紀元前800年、周の時代とかで、日本は紀元前。明らかに西高東低で流れてきているのですが、中国の冶金学の先生は、「いや、これは中国独自の開発の仕方です。製鉄したんだ。西方のコピーじゃない」と言うのです。でも流れとしてはやっぱり冶金の技術なんていうものは、西から伝わって来たと考えられるのですが……。

【方位について】

稲葉：エジプトに行ってはじめて気が付きました。東洋では南北軸というのは、中国の影響なのです。「天子南面す」と言ったら天子は北側から南側を見下ろす。京都なんか左京と右京が逆になっているのは、天皇の側から見て左京右京って言うので逆になっているのです。あれは仏教が入って来てからです。それまでは農耕民族というものは、東西軸が基本なのです。これは私がエジプトへ行ってからわかりました。西の世界に日が沈む、そこに黄泉の国があるわけです。だからみんなナイル川の西岸にピラミッドもあり、王家の谷も作って、東側は生きた現世の世界になっています。東側にはお墓作ってない。だから川を渡って、いわゆる三途の川を渡ってお参りに行くのですね。

日本の神社も、もともとは東西軸なのです。だから「日出ずる国」って言うでしょ。要するに神様はみんな東側に祀られており、参拝するときは西から東に向かって行い、南北ではない。仏教が入って来てから南北軸に変わったのです。砂漠や海上では、北極星というのがすごく重要な航海の目印でしょ。あれは、北を崇めるといのが重要だからなのです。農耕民族では、あまり北極星がどうのこうのって言わないでしょ。中国もおそらく古くは東西軸だったと私は思うのです。日本では明らかに仏教が入ってきから南北軸に変わりました。キリスト教は東の聖地を向いてお祈りしますが、あれはもともと農耕民族の考え方であり、教会は西側に入り口を取って、西側の光が奥のステンドグラスまで入るようになっているのですね。

【絵と解説で読みやすい建築の本】

稲葉：私、結構若い時代に「日本人のすまい」という本を書きました。まだ本屋で売っています。絵と解説のいわば絵本ですが、この手の本としては初めての試みでしてね。これでも、3年位かかりました。素材も遺跡を廻って調査して仕上げました。京都やなんかにも行って。遺跡の下駄とか調べて大変でしたね。鼻緒が真ん中なのです。今は端にあります。昔はね古い奴は真ん中にあるとかね。そういうのを見る読者が色々クレームつけてくるわけですから、そこまでちゃんと調べないということになって。絵は中山さんをお願いしました。下絵は私が描いて中山さんが絵を仕上げてくれたのです。この本の翻訳版は英語版と中国版と台湾版が出ております。

【日本建築史学の創始者伊東忠太先生の設計した建物の特徴】

尾崎：付け加えますとね、先ほど伊東忠太先生の後を受けて、研究をやられたというお話をさせていただきました。それで伊東忠太さんというのは建築史の専門家で、東大の建築史の教授でした。一方、あの時代に、結構建物をたくさん設計して築地本願寺もそうなのです。建築史の専門家だけれども、設計もおやりになった。

稲葉：本当は、伊東忠太先生は自分の弟子である関野貞先生に建築の調査をやらせていたのですが、建築史は先生が言い出されたので、一応先生が中心ということになっているのです。でも本人は設計が好きだったのでしょうか。みなさんあまりご存じないかもしれませんが、築地本願寺、今度、重要文化財になりましたけどね。あれは、正面が西向きに立っているのです。震災前まではもともと南向きで、築地の市場の方に向かって建っていたわけですが、震災後建て直して西向きにしたのです。私はなぜだろうと疑問に思っていたら、その東側に明石町という居留地があったのです。これね、我々の上の世代しか知らなかったし、その世代もあまり書き残してくれませんでした。実は、江戸の東京の最初の居留地なのです、明治2年に出来ました。それまでは横浜が開港して居留地ということになっており、日米和親条約を結んだときは横浜・江戸の両方に居留地を開くことになっていたのだけど、江戸は幕末の動乱期で、そんなときに外国人が来られてもというので開かなかったわけです。そうして明治2年に作ったら、横浜のミッションが宣教師を連れて明石町に移って来たわけで、教会が全部で11位出来て、チャペルも幾棟も並び、上海みたいな雰囲気だったようです。まわりの人に聞くともう土日になるとチンチンチンとカリヨンが鳴るしね。にぎにぎしくて素晴らしかったそうです。という明石町が築地本願寺の東側にあるわけです。そこから、当時蒸気船に乗ると横浜港に30分位で行けたので、いい場所だったのだそうです。

そこへ震災後築地本願寺を作ったのです。私はなぜあそこにあれをと思うのです。それは多分、伊東先生は、あの、インド様式とも言えない何とも言えないスタイルの建築ですが、あれは、東側の明石町の西洋キリスト教建築に対して、東洋を代表する一つの建築スタイルを作ろうとしたのではなかったかと思うのです。大谷さん(大谷光瑞。浄土真宗本願寺派〔西本願寺〕第22世法主、伯爵)と伊東先生は中国で知り合ったのです。それ以来パトロンに

なりました。大谷さんは金をいっぱい持っているので、大谷探検隊なんて組織してシルクロードに調査に行って、敦煌や各地の遺跡調査をやって、経典や仏像などいっぱい貴重な遺産を発見したわけです。そのお宝を旅順、朝鮮、京都と三つに分けて、保管したのです。もう日本のものしか無くなりましたけど。その大谷光瑞って人は伊東先生のパトロンみたいな人でしたので、「建てろ！」って言われて神戸の六甲のところに贅を尽くした大谷さんの別荘を作っています。もう無くなりましたが。

もう一つ伊東先生と言えば、日本の神社は、ほぼ先生の設計です。それまではお参りする神社は伊勢神宮しかなかったのですが、明治維新で国の宗教が神道になったからと言っても、一般の人がお参りする社がないわけです。それで卒業の時に平安神宮を作り、その後、奈良に橿原神宮（かしはらじんぐう）という天武天皇を祀るお宮を作って、それから全国各地、沖縄、台湾、朝鮮、満州まで神社を作り続けました。靖国神社、明治神宮などその数は10数社は下らないと思われます。

【民家の保存運動にかかわって】

稲葉：私そうやって民家から始まった建築史研究だったので、わかったのですが、私が大学院の頃からどんどん日本が開発されていきます。高度成長で、「私の城下町」なんて歌ができましたけど、そういう歌が出る位、古いものがどんどん無くなっていく。そういう古い町並みとか民家とか近代建築の調査をずっとやっていたのです。それは私だけではなくて色々な大学と連合して、ここにはこんなものあるよ、あんなものあるよ、とニュースを出してね。そういうリストを作っていくなかでだんだん見る目もできてきて、そしてやがて、それが国の文化財やなんかになっていくわけですけども。ちょっと遅れて地方自治体が、だんだん力をもってきて、じゃあわが街には何があるとか、となっていて、そういうところの文化財保護審議会委員を頼まれて、じゃあこの地域の民家を調査しようとか、いうのがずっと10箇所位あるので、今もまだやっているのです。それは一つの社会奉仕で、つまり過去に学生連れて調査やったから恩返しをしないとイケないということです。調査やなんか学生と一緒にやったので、今でもそういうことで地域と繋がりをもっているのです。それは別に好き好んでやったのではなくて、大学が定年になったら、「お前暇だろう」ということで引っ張られまして。学校に就職していた時代にはとてもそんな多くは出来ないですよ、授業があるし、前はできなかったけど、今はお引き受けして、今日も武蔵野市で夜会議があるのです。そういうふうに週に3回かそこらどこかに行くことになっているのです。私の最後の民家園は、昭和記念公園の中に、「こもれびの里」って民家園を作ったのです。そこには水田や畑、茶畑も作り、水車も作り、そこに主屋を移したのです。主屋は東京の代表的な民家にしよと思っていたら、国交省があてにしていた家を八王子市に持って行かれてしまい、無くなってしまったのです。それで仕方ないので多摩地区にお触れを出して、古い民家ください、ってやってみたのですが、なかなか出て来ないのです。そうしたところ、私の住んでいる狛江市の元名主の家がありがたいことに「稲葉さん持っていかないか？」って言ってくれて、

その主屋と長屋門、土蔵も全部を解体して昭和記念公園に移して出来上がりました。かれこれ10年位かかったでしょうか。

私が入った頃は建築史なんかやろうという学生はほとんどいなかったのですが、今は建築学科の中では、どこの大学でもそういうことをやりたいという学生がすごく増えてきているのです。というのは、そういう街々に民家などが残っているし、それは大事だということにみなさんが気付いてきているし、一方建築家は壊さないと仕事にならない、仕事取れない、だから、あまり残そうなんて言い出さなかったのです。ただ最近建築家協会にも保存部会というのが出来て、それで残しながら、新しいものも作ろうというふうに変わってはきました。私は30年くらい前に建築家協会で、「保存を早くやるように」って言ったのです。医師会と同じように。医者は、病院作っている人たちが地域医療をやっています。建築家だって、やはりそうすべきだと言ったのですが、皆さん仕事が欲しいから都内に集まる。大きい仕事をとるためにはそうするしかない。だから自分の住んでいるところはほとんど面倒みてないわけです。ようやく今建築家の中で保存に向けたいい雰囲気が出来てきて、地域に「守る会」みたいなものが出来てきました。外国でそういうシビクトラストとかトラスト運動とかをやっているのは、地域のそういう建築家たちが皆がんばっているからです。古い建物維持管理を全部リスト化して、ナンバリングして、これはどうだ、こうだ、ということをもみんなやっていきながら残しています。日本もそういう時代に今なりつつあるから、良くなってきたと思っています。

【建物の維持・管理を重視しない日本】

尾崎：そうですね。私の建築の同期で戸山を出た人（大村〔S31年〕さん）が大学出てすぐイタリアに行ったんです。それでイタリアの女性と結婚してずっとイタリアで仕事していた。里帰りして日本に来た時に、建築のクラス会に出てきたので、「どんな仕事しているの？」って聞くと、「イタリアでは新築の建物はほとんどない」、と言うのです。だから、仕事としてはもっぱら改修ですね。古い建物を改修して建物を維持する。それと都市計画策定。「とにかく仕事が非常に少ない」と、言っていました。それで、また何年前に会って話したときには、子供が2人いて、娘さんは建築を学びアメリカの建築家と結婚してアメリカのニューヨークで生活しておりアメリカでは設計の仕事も多いので本人もニューヨークへ移住したのです。という話で、日本みたいに馬鹿みたいに長い35年のローンを組んで、払い終わったら死んでいく、そういう国はないですね。ヨーロッパではじいさんが建てた、父親がそこに住み、自分が住み、その子孫も住んでいるわけですね。地震はない、台風もないからそういうこともできるんだろうと思うこともありますが、日本の現実には災害が原因ではなく、住めるような家でもともかく寿命がきたと言って壊して建て替える。風潮がそうなっています。だからマンションの大規模修繕などでも、マンションをきちんと12年とか15年おきに外壁とか防水とか修理する、併せて給排水管も更生、今までの配管を生かしながらやる、それから更新、配管を替える、そういうことをやればヨーロッパと同じように、優に

100年位もつわけです。100年以上かもしれません。だから向こうの建物、話によると、バチカン市国なんかでは、一番若い建物でも200年とか300年も経っている。日本も早くそういうことにしないと、いくら働いても、何の足しにもならない、ということになります。これがなかなか一般の人にわからないというのは、江戸時代からとにかく火災になれば、すぐ作る習慣になっています。だから家の寿命は30年か40年位とみんな思っているわけですね。だけど現実はそのではなくて、メンテさえきちんとしていけば、本当に長くもつ、ということがなかなかよくわってもらえないのです。そこでもう少しみんなが改修より建て替えを選ぶ理由について考えてみると、ひとつに税制があります。減価償却で、木造なんかは25年だとか、鉄筋とか鉄骨は35年とか、なっていて、そうすると償却が終わったら、建物の寿命が終わったと勘違いしているんじゃないですか、ということです。現実はいりませんよ。どんな理由でどんどんぶっ壊しているかは。だけど今でもどんどんぶっ壊して建てる。タワーマンションとかこんなのがいっぱい建っています。だけどそこに住民が移るでしょ。その住民が新築マンションに引っ越す前に住んでいた住宅やマンションの住戸がゴミになる、要するに人口が減少している現状では、新しい家を建てれば建てるほどゴミが増える。残念ながら。マンションなんかでどんどん人が移動して出ていくと、たとえば全戸の何割かが抜けるともう維持ができない。よっぽど修繕積立金とか、管理費等、倍増ぐらいしないと維持できない。ところがそんなことは現実にはできないわけですね。みんな住んでいる人が反対する。そういう問題をかかえているわけです。だから極端に言えば、集合住宅の建設を規制するくらいやらないと無理ですね。逆に政治家は業界、不動産業界、建設業界の票がほしいから、すぐ新築をすれば減税がどうこうとかね、そっちの方に税金がどんどん流れるようにしているわけです。それで建物ゴミが一方に増えているわけです。そのゴミたるや大変なものです。土地にしても、日本で北海道面積に匹敵する面積の土地から税金が取れない。要するに所有者がわからないのです。まあ、そういう馬鹿な時代になっている。今でも農地をどんどん宅地にして建売住宅を建てている。そんな家を子供は一切引き継ぎません。駅から降りてバスに乗り継ぐ、車が無ければ行けない、そんな家を使う人はいない。これらの建物はすべて利用されていない。廃墟です。そうするとまたゴミが増えていく。そういう世の中ですね。だからどこかでコントロールしない限り日本は、家を建ててはゴミを作って、そのうちに国ごとつぶれていくということになります。2年ほど前、日光の、リゾート地域に車で回ったときにわかったことですが、日光の鉄道の駅のそばに、昔は車とかそんなものがなかったので、旅館とかホテルがいっぱいあるのですね。今はそんな駅のすぐ降りたところになんかリゾートに使う人はいない。それは全部誰も住んでいない。廃墟です。その廃墟がいっぱいあるのです。経営者は赤字の旅館やホテルなどはつぶすでしょ。建物はあっても会社はない。したがって税金は取れない。さらにその建物が国道に面していて道路側に倒れたら大変なことになるので、それを壊すのは結局市町村役場。税金が入らないで出ていくばかり。そういう現実ですよ。本当に情けないですね。ゴミを作って、建築の新しいのを作る。新しいのを作れば作るほどゴミは増えると。ま、そういう時代ですね。残念ながら

ら。

稲葉：結局、消費社会の、資本主義の問題ですね。消費することによって回転するという発想を住宅にまで及ぼしているからいけないんで、どこかでストップしないとね。

尾崎：今家を建てるために税金をつぎ込んでいますね。新築だったら減税とか色々あるでしょ。無駄なお金をさんざん使っています。一方建物を壊すにも大変なお金がかかるからみんなほったらかしで逃げちゃうしね。結局ゴミになってしまう。壊して、更地にしたら今度は大変な税金がかかるものだから壊さないのです。本来はそういう不要な家は、逆にどんどん壊してもらって土地を別の用途で生かしてもらうのがいいのですが。壊さずに貸すという手はあるのですが、これが自由に処分できにくい。今は昔から貸している人は別として新たに貸すとすれば、定期借地権とかあります。そういうことがあるから少しは逃れられる。昔はとにかく借りた人の権利はものすごく強力で、住宅地だったら半分以上、商業地なら八割の権利がある。その法律条項はなんのために出来たのかと言うと、戦争中に男がみんな取られて死ぬでしょ。戦前は、みんな借家なのです。主が死ぬと追い出される。それで戦争に行って名誉の戦死した人の家族を家から追い出すのはいかん、というので追い出さないように国が戦時立法として作ったのです。借家人を守った。それを延々と何十年もそのままにしてしまった。今は新しい定期借地権と言うのがあるのでいいのです。昔ある時点、定期借地権のない時代は、家を貸したら土地を取られたのといっしょのことになってしまいました。現実にそういう事例がたくさんあるわけです。

稲葉：尾崎先生とも関係する話ですが、民家はみんな修理して直してずっと使い続けてきているのですね。今の住宅は使えなくなるとみんな廃材にして捨てるだけでしょう。あれ、やっぱり修理して使えるような手法を考えるべきですね。

尾崎：だからこそ、新築に税金をつぎ込まずに、建物を生かしていくというところに目を変えるべきでしょう。だけど国交省というのは必ず業界を守る、国交省以外もみんなそうですが、だからそういう発想は国には全くありません。極端に言うと、たとえばマンションでも外壁の防水とかやるだけではなく、給排水管も更新しなければ、延命しなければ、ならないのですが、そういうことに対して国は何を言っているかと言うと、給排水管は30年から35年で更新しなさい、とそれだけです。そうじゃなくて、更新じゃなくて、ある時期が来れば、更生です。新しくする点で更新もいいにきまっていますが、更新は配管が露出するのです。廊下に露出、へたすれば外壁に露出、それでは日本人の感覚に合わないのです。向こうの建物は、では、どうしているかと言うと、ヨーロッパ等はパイプシャフトに給排水管を収納しています。日本はぎゅう詰めにはしています。ヨーロッパ等はパイプシャフトですから、その中で配管を替えようと思ったら替えられる。それから昔の冷暖房を見てみると向こうは平気で配管は露出。ダメになれば替えていく。そういうことで、別に壁の中に配管を入れる、床下に隠す、そういう発想は全くない。だから向こうの建物は建築が頑張っている限り、たとえば学校がホテルになったり、何になったりでもなんぼでも使っていくわけですね。日本は壊すことしか知恵がない。

稲葉：第一次大戦に、ようやく集合住宅をヨーロッパ、たとえばドイツなんかが作るようになるわけです。有名な建築家なんかも集合住宅作っている。今、それがなんと世界遺産になっています。まだ使っている。色を塗り替えているだけで。日本はみんな壊すだけです。もたないからと言って。

尾崎：その発想を変えない限り、いつまでも日本人は稼いではローンで終わりの人生。

【検査制度と欠陥建築の関係】

尾崎：それから、技術的に日本はアメリカを建築でいえば馬鹿にしているところがありまして、関西の地震が起こる直前に土木だとか建築の専門家が行って、アメリカに構造などの面で説教（構造設計の基準を上げるなど）したのです。アメリカの場合は、結構、高速道路とかそういうのが倒れたりした。日本にはなかった。それでどうして基準をちゃんとして倒れないようにしなければならないのに、やらないのですか、そういう説教をして、帰ってきたときに、日本が阪神・淡路大震災でやられたわけ。要するにアメリカの建築技術をそうやって馬鹿にしていた。だけど、我々の住宅の世界から見ると、アメリカは素晴らしい。なぜ素晴らしいかという検査制度というのがあるからです。日本の設計施工というのは無法状態。とにかく誰もチェックする人がいない。それで、レオパレスとか色んな欠陥建築がいっぱい増える。アメリカには、インスペクター、検査員がいて、検査員は役人でもなんでもないので。民間の設計事務所で検査資格を取った人です。それで、たとえばコンクリートの基礎で配筋しますね。そうすると、配筋検査をする。構造事務所がやるわけです。その検査員の判がない限りコンクリートは打てないのです。それで軸組が出る。パネルでもなんでも構造が出る。そしてそれをまたチェックする。それで最後は電気設備をチェックする、ガス設備をチェックする。全部チェックする。それは構造事務所が検査員が判を押す。したがって、その家に問題あったら、どこに問題あったのか、すぐわかる。この検査が甘いとなれば、それは、当然、検査員資格は剥奪される、事務所は罰金取られる、とハッキリしているのです。一方日本は、ほったらかし。ほったらかしというのは、どういうことかと言いますと、明治政府は、トップの半分ぐらいの人が2年間位全世界を廻って色々勉強してきたわけです。それで、何を学習してきたかと言うと、やっぱり医者は作らなくてはならない、弁護士も作らなくてはならない、とわかってきたのですが、建築家はどうか、という議論はないのです。要するに大工さんがいれば何でも家ができる。それで建築家は無視された。だから、監理は行われずに工事が進む風潮になってしまいました。それで、建築家協会も戦前は一生懸命運動して、5回ほど、要するに施工と設計監理を分けると、こういう法案を出したんです。ところが衆議院は通ったけど、貴族院は通らない。それはゼネコンの力が及んだので。さて、敗戦後は、という建物ゼロになったところを作るに必死でそれどころじゃない。それで建築基準法とか色々できたけども、結局は設計と監理とを分けることができなかった。それでゴチャゴチャになってしまった。その、ゴチャゴチャの典型的な事例はなにかという、5年ほど前にM地所が設計監理して、K建設が施工した、マンションがあ

った。ほぼ地下部分の躯体工事が完了した頃、下請けの業者が施工写真を撮った。通常梁にはスリーブという穴がある。穴があって配管・ダクトなど全部通す。ところがその穴がない。それで、こんな建物あるの、ってバァーっと発表した。それでみんなビックリ。もちろん欠陥証拠はある（写真）。それでどうやって解決したかっていうと、私が聞いた範囲では、M地所はK建設に、「全部ぶち壊して建て直せ、費用は一切K建設の負担である」と指示したそうです。こういうことを聞いています。それで全部壊して今では竣工しているでしょう。そういうバカなことをしたそうです。普通だったら、国交省が動きます。M地所は設計監理です。現場で見れば一目でわかります。配管のスリーブが無いのは一目瞭然です。それをなんとK建設に工事をまかせる。K建設は下請けにまかせる。誰も責任を自覚しない。現実になんかそうだった。普通感覚であれば、国交省において、営業的にみるとM地所、K建設、それぞれに責任を取らせるべきでしょう。しかしそれは一切できない。やらない。それは業界保護で。だからいつまでもそういう馬鹿な事が繰り返される可能性が非常に強い。残念ながら。これはどこが悪いということじゃなくて、日本は明治政府から延々と業界保護でやってきた。消費者のことは考えない。極端に言えば。だから話は飛びますが、エイズもそうでしょう。エイズの血液製剤。アメリカでは問題が発覚するとすぐ血液製剤の生産は中止される。でも日本はなんとかかんとかしてそのままにして、ああいう大問題になってしまった。それから断熱材のアスベストも、アメリカではその人体に対する害がわかっただけで生産は停止です。日本はなんとかかんとかしてそのまま放置され、その間にアスベストをいっぱい建物に組み込んでしまった。だから今アスベストを取り除くのに大変な費用がかかっている。私なんか若いころ、よくわからないから鉄骨の建物で、アスベストのチェックを一生懸命やりました。針を刺しておいてちゃんと厚みが25mmあるかどうかチェックして、さらに手で触ってみて確認するなんて、そんな時代がありました。今ではほんとに考えられない。要するに設計施工ということは、チェックする人がいない。当然、役人はしません。役人がやることは、竣工検査ってあるでしょ。よく昔、住宅など設計して見てもらうと、平面図がありますね。図面の通りに出来ているかどうか、違反建築がないかどうか、6畳があって、8畳があって、ダイニングキッチンがあって、そうなってればOK。要するに中身がどうのこうのということは一切チェックしていない。だから検査済み証というのは検査終わっていますよ、というだけで何の意味もない、実質的に。だから端的に説明しますとね。たとえば、私ども30年位前にマンション設計をして、当時もパソコンで多量の枚数の構造計算書が出ます。まず意匠図のチェックが終わり、次に構造に書類をまわす。当時新宿区役所の近くにいましたから、構造担当者に「いつ見てくれるんですか」、と聞くと「10日で見ますと」。私は10日目に区役所に行きました。「見ました?」「見ていません。」それでもう一度行ったとき聞いて、「見ました?」と聞くと、また「見ていません。」それで3回目に行ったとき、私は怒鳴ったんですよ。「お前はどこを見るのか!コンピュータの計算した数字を見る、そんなことはあり得ない。設計条件だけを見ればいいんじゃないのか!今すぐ確認下せ!」それで相手は何も見ないでハンを押して出してきた。そういうことなのです。構

造になると、実際に日常で構造計算する、現場を見る、そういう人じゃない限り、パソコンで計算した資料が正しいかどうか分からない。それで、それを悪用したのが姉齒です。姉齒はなぜごまかすことができたかという、あの時代になると、我々が昔やった時代と違って海外の仕事も多かった。海外の仕事が多いと構造の設計基準が違うのです。だから、日本のパソコンでいうと全部それはNG、ノーになる。ノーになって初めてそこで一旦切れて、また修正をしてやり直して、実際にやる。ところがノーになったやつを姉齒はなにもしないでOKにしちゃう。それが日本なんて実際に仕事している人以外には読めない。それであいう馬鹿なことになった。そこで設計事務所の方は、当然設計士はクビになったり、その設計士の奥さんが自殺したりで大問題になった。大会社の場合は関係者を形だけどっかに左遷したりして終わり。被害はなにもない。だから、さっき言ったみたいに、営業停止ぐらいにやらないとダメなのです。それで、じゃ、役所はどうしたかという、適判（構造計算適合性判定）にする。要するに構造をチェックする人は民間の能力の有る人を集めてそこでチェックしてもらう。もう構造検査の役人はいないのです。でも現実には残っています。だから時間も無駄。金も無駄。要するにどうということかと言うと、意匠図のチェックが終わる、後は私の感覚で言えば適判になればいいのです。ところが実際は役所に書類をまわして適判に行くという。役人が残っている。そういうことだから。私が2~3年前に確認申請で千葉の市原の役所に行ったのです。今確認申請は民間の団体であれば全国、東京都の事務所で打合せして全部OKなのですね。OKになっても一応役所はそこでまた操作する。そこでね。そういう形式はあります。だけれども、市原市役所に行きまして、昔もそこに行きましたけど、前と同じスペースに同じ人間がいるわけですよ。それで「民間の確認申請の事務所が出来てね、あなたたち仕事はどうなりました？」って言ったら、「かつての10分の1ですよ。みんな民間になっている。」一般の設計事務所が役所に申請を出さずに民間の申請事務所に書類を提出するのは、遠方の役所に出向いて打ち合わせをすることなしに都内にある事務所で打ち合わせた方が効率的だからです。そういう状態なのに部署も変わらない、人間も変わらない、そういう馬鹿な国です。残念ながら。そういうことを野放しにしていたら税金はなんぼあっても足りないということです。それからもう一つ馬鹿な話ししますが、住宅公団、っていうのが以前にありましてね。今は名前変わって、URです。それが平成の初めの頃。分譲マンションの「…南大沢」という名で何棟も作った。それが非常に問題だらけ。雨漏りがある、それから工事の施工が悪い、ということがわかった。それで、たまたまテレビを見ていたのです。そしたら、テレビで南大沢のマンションが、雨が降るとザーっと室内に水が漏ってくるわけです。インタビューしていましたが、「これ公団に言ったの？」「もちろん言っていますよ。回答は結露だって。」雨が降っているときに漏るのは結露じゃないですよ。そんなのあたりまえなのだけど、素人を騙すためのテクニクはよく知っているわけだ。だけどテレビに出たのはその1回だけですよ。後は一切出ない。でも現実には大騒ぎになって、建て直し、それから改修にもなりました。大変なお金を使っている。それで、建て直しの経緯も漫画みたいでした。住民が陳情して、扇さんという女性の国交省の大

臣が受けて、住民から「見てくれ、こんなふざけた建物あるか！」と言われて現場に見に来た。ただ大臣は時間が非常に限られているので、本当は見なければならぬところはいっぱいあるけども、彼女は見て「や、ここも建て直し！」「ここも建て直し！」「ここも建て直し！」とだけ一瞬言って後は時間が無くて帰ってしまった。大臣が言ったところは建て直し。そうじゃないところはそれから大規模修繕に添えて改修するという馬鹿げた話になりました。それほど検査制度がないためにとんでもないことになっています。もっとも検査制度がないといっても、住宅公団の検査の制度は形式的にはやっています。やっているけれども、現実はこのざまです。そうだったら、極端に言えば、住宅公団のチェックしたところは全部バツ！としていいのだけれども、そういうことはやってない。だからなんぼやっても欠陥の繰り返しで解決にならないわけです。だからハッキリ言えば、検査は民間の事務所で資格をちゃんと取ってやるところがやるのが、一番です。

稲葉：今どこの役所もそのようですね、指導者がいなくなっています。役所に入ってもみんな若い人が誰にも教わらないわけです。前はゆとりがあったから上の方はちゃんと下の人を指導して現場やなんかやっていたけどね。

尾崎：現実がそうだから。9割を民間が確認下しているのです。役所は形式だけ。形式っていてもこっちがOKして向こうがNOって言うはずもないわけですが。だから、また別の話になりますが、台湾では確認を下すのはどこかと言うと役所ではない。民間の設計事務所です。大手の事務所でそういう能力の有るところを選んでいきます。だから、今のレオパレスなんかでもテレビで色んな有識者というものが発言をすると「ああいうものは役人が検査しなきゃいかん。それには役人を増やさなきゃいかん。」とか喚いているけれども、そんなことは全く必要ない。本当にくだらない。それが建築の我々の常識です。

稲葉：機械だって最近同じですね。自動車の欠陥検査の話がしょっちゅう出ますね。なんであんなことがポロポロ出てくるのだろう。

尾崎：極端に言えばね、最終的に売り出すメーカーがあるでしょ、トヨタとかなんでもいいのですが、そこが責任取って何か月か営業停止とか、それぐらいやらない限りは治らないのです。

（最終検査をメーカー自身がやっています。改善するには、第三者が検査するしかありません。泥棒に泥棒の検査をさせたら駄目なのは当然です。）

尾崎：建築の検査は今みんな建設会社が自分のところでやっています。極端にいうと、設計・監理いっしょ。設計施工。みんな自分のところ。だから国は何を決めているかと言ったら、ちゃんと建築主は監理者（設計図書通りに建設しているか現場をチェックする人）を決めなければならない、とこうなっている。そうすると、ゼネコンとかそういうところは監理者を自分のところの会社の社員にさせている。それはそれでいいのですが、それで問題が起これたら、監理者に責任をとらさなければいけない。ということは、一時あったのは、設計事務所でも昔は、小さな事務所はハウスメーカーとか大工だとか工務店とかの顧客に、図面を確認申請で、簡単に描くだけ。平面図、立面図、それで簡単に確認が下りる。後何にも無くて

も確認が下りる。そしてそこに、設計事務所は監理者として判を押させられるわけ。図面代を払うからここに判を押せと。それが裁判所で問題になって、「判押した以上監理者は責任をとれ！」で大変な罰金をとられた。それで、誰も判押す人がいなくなった。だけど、会社の人だったら押せる。実は会社の人だろうが何だろうが監理者として判押して問題起こったら、それこそ罰金、営業停止となるべき。それぐらいやらない限りは意味ない。ところでその会社に欠陥の通報来た場合、会社は何しているか。設計事務所の場合は、大変です。裁判所から罰金取られる。だけど、建設業界で、判押した人が罰金を取られた話は聞いたことがない。そこをハッキリさせないと、意味がない。一級建築士であれば誰でも判押せる。判押するのが問題ではなく、判押した後のことが抜けているのです。それで設計事務所だけは、みな大変な責任を負っている。「自分は監理契約してないです。」と言っても「監理契約はしていないけど判押した以上は、駄目だ！」って罰金に来るわけです。ところが設計施工の場合、判押した人がいない限り確認下りないのだから。誰かが押している。その誰かが、責任を取った話を聞いたことがない。ほんとに情けない。要するに業界保護というのを明治の初めからもう延々と続いて直らない。消費者保護に変えなければダメです。

【建築家は本来自然環境を基本にすべき】

稲葉：西洋ではローマ時代から建築家って出てくるのだが、建築家の仕事は、兵器を作ることから、橋も作るし、建築することももちろんあるし、本来は色んな分野を含んでいた。それだけやらないと建築はできないというぐらいにね、ウィトルウィウスはそう述べていた。ところがルネッサンスの頃になってくると効率をよくするために、じゃ俺は絵が得意だけど、彫刻は彫刻家に独立させようとかだんだん分かれていくと、結局家づくりだけが建築家の仕事になってしまった。本来は人間の環境全部を見なくちゃいけなかった、衛生から医学、天体まで勉強しろというような状況だった。それがどんどん分化していくのです。それは効率をあげるために当然そうだろうし、そうなってきました。でもやっぱりそろそろ戻って総合化ということに立ち返るべき時期なんではないでしょうか。専門集団に完全に分かれて、それはそれである意味良いところもありますが、本来に立ち返ってみるとやっぱり人間生活のすべてを建築家は面倒みなくてはならないはずだったと思う。それは事実、日本の建築の棟梁だって、山を見ながら木を選び、木を育てながら建築を建てるという思想を持っていました。だけど、それだけだと効率が悪いから、結局なんでもいいから切っちゃって製材した方が安上がりになるということになってしまった。昔父親の時代に家を作る時には、山に行って「これとこれ」と言って選んで材木を買い、寝かしてから製材した。そんな時間今は無いのです。自然環境に合うこともやっぱり考えなくちゃいけないのだけれど、効率化や機械化だけの方向に来てしまったので、建築家が色々おかしくなっているとは思います。新木場なんて貯木場に今木は入っていません。強制乾燥です。あれでは建築もたないですよ。やっぱり、環境にあった木を使うことが本来です。外材持って来ても日本に合うわけがないのです。国産材はコストが掛かると言われますが、やはり国産材を使用して自然環境の循環を

図るべきでしょう。



出席者：左から順に（敬称略）（写真は8名。出席者は9名）
於保（S35）、斉藤（S32）、尾崎（S31）、庄内（S32）、稲葉（S32）、
白石（S41）、後藤（S50）、兵頭（S50）〔森川（S51）は一時中座
外出して写真に入っていない〕